

山口県埋蔵文化財調査報告第93集

県営圃場整備事業に伴う  
惣原遺跡発掘調査報告

# そらばら

1986

財団法人 山口県教育財団  
山口県教育委員会

## 序

各種の開発によって県下各地の埋蔵文化財が消滅していく頻度は、ここ数年とくに多くなってきております。

そして、それに伴って県土山口を築いてきた先人達のその永いいとなみを今に伝える数多くの資料が、県下各地で発掘されております。

財団法人山口県教育財団は、教育・文化の振興という立場から山口県教育委員会と協力体制をとり、本年度から山口県農林部の委託を受けて圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施することといたしました。

ここに報告いたしました阿東町所在の惣原遺跡の調査では、中世の集落跡と製鉄関連遺物などが発見され、その成果は当時の人々の生活や文化を知る上での貴重な資料となっております。

本書が学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

調査にあたりまして御指導・御協力をいただいた関係各位に対し、深甚なる謝意を表わします。

昭和61年2月

財団法人山口県教育財団

理事長 井上謙治

## 序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、あわせて開発と文化財保存との調和のとれた県土づくりを目ざして、山口県教育委員会では関係機関と協議を重ねるとともに遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

昭和60年度は、阿武郡阿東町にある惣原遺跡の発掘調査を実施し、中世の集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活や文化を知るうえで数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書は、その調査成果をまとめた記録であり、広く文化財に対する認識や理解のため、また、学術研究の資料として活用されんことを願うものです。

おわりに、発掘調査の実施にあたり御協力いただいた関係各位に対し厚くお礼申しあげます。

昭和61年 2月

山口県教育委員会

教育長 高 山 治

## 例 言

- 1 本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が昭和60年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、山口県阿武郡阿東町地福上に所在する惣原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 調査組織は、次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県教育財団（理事長 井上謙治）
	山口県教育委員会（教育長 高山 治）
事務局	財団法人山口県教育財団（事務局長 田中義人）
	山口県教育委員会（文化課長 吉武康昌）
調査担当	（総括）山口県埋蔵文化財センター（所長 吉武康昌）
	（次長 中村徹也）
	（主任 藤本嘉和）
	（調査員）財団法人山口県教育財団事務局指導主事 大村秀典
	山口県埋蔵文化財センター文化財保護主事 西岡義貴
- 3 発掘調査の実施に当たり、山口県山口土地改良事務所・阿東町役場・阿東町教育委員会・阿東町地福土地改良区の協力を受け、また、発掘調査作業員として参加していただいた地元の方々に大変お世話になった。記して、謝意を表する。
- 4 惣原遺跡から出土した遺物（鉄滓）の分析を社団法人日本鉱業会調査役 葉賀七三男氏に依頼し、玉稿をいただいた。
- 5 出土遺物の整理に当たっては、山口県埋蔵文化財センター長沼昭乃・増田真由美・岩崎悦子・大村眞澄・田良倍美・岡田洋子・永久早苗・葛山清美の協力を得た。
- 6 本書に収録した写真の撮影・実測図の作成は大村と西岡が行い、実測図は永久がトレースした。
- 7 本書の編集は、西岡が行った。また、本文の執筆は、中村の指導のもとに大村と西岡が共同で担当し、西岡がまとめた。
- 8 本書で使用した方位は国土座標で、レベルは海拔標高で示した。
- 9 本書に掲載した地形図（遺跡の位置－3頁）は、建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図「徳佐中」を複製し使用した。

県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

# そうばら

ふるさとふるさとの歴史を訪ねて

## 目 次

大地にのこる足あと

時のながれに

掘りおこされた集落

水 と 炎

よみがえる歴史のロマン

〔付 編〕

惣原遺跡出土鉄滓の  
金属学的調査

## \*\* 大地にのこる足あと \*\*



△弥生土器(突抜遺跡)

本遺跡は、阿武郡阿東町大字地福上字猿久保に所在する。遺跡名に冠した「惣原」とは、付近一帯の行政区の呼称である。

惣原遺跡のある地福盆地は県都山口から北東に約25km、中国山地の断層線上に開けた山間の小盆地で、盆地の南を著しく偏向して北東から南西方向に県内第二の大河、阿武川が流れている。盆地の平坦地の大部分は阿武川の北側に広がる河岸段丘と南北からこの川に流れ込む支流がつくり出した扇状台地から成っており、その標高はいずれも260~280m前後と高い。

遺跡の位置するところは盆地の北から阿武川に合流する長谷川の扇状台地の南西縁辺に当たり、標高は約270m。遺跡の北側には大蔵ヶ岳(834m)に続く丘陵が、南側には阿武川右岸の河岸段丘上に水田と国鉄山口線地福駅を含む惣原の集落が展開している。



△弥生時代の集落跡(突抜遺跡)

地福盆地とその北東の徳佐盆地周辺には、惣原遺跡に時代的に先行する遺跡がいくつか発見されている。縄文時代早期の押型文土器が見つかった徳佐高等学校遺跡や縄文時代後期の住居跡とされる原遺跡がその代表としてあげられ、さらにこの地方に本格的に農耕文化が定着した弥生時代前期末からの集落跡としてはこれまでに惣の尻(弥生時代前期末~中期)・坂手沖尻(弥生時代中期後半と古墳時代)・宮ヶ久保(弥生時代中期中葉)の三遺跡が圃場整備事業の工事に伴い発掘調査されてきた。特に宮ヶ久保遺跡からは住居群や倉庫群を取りまく大規模な環溝から日用什器・農工具・武器・祭祀道具等の木製品が多量に出土し、その時代の人々の生活の様子を解明する貴重な手がかりとなっている。



△木製品(宮ヶ久保遺跡)

地福盆地では最近まで遺跡の発見例は報告されていなかったが、昭和59年度の圃場整備事業に伴い突抜(弥生時代前期末~鎌倉時代)・馬場(同)の両遺跡が調査され、徳佐盆地と同様寒冷な山間地における農耕文化の展開が明らかになってきた。また、突抜遺跡からは平安時代初頭の鍛冶炉跡と推定される遺構とそれに伴う遺物(スラグ)が多数発見されており、一じふく一の語源を探るものとして注目される資料が得られている。

## ＊＊時のながれに＊＊



△重機による耕土の除去

農業の近代化施策の一環として、全県的に農業基盤整備事業が推進されている。阿武郡阿東町地福盆地においても、昭和57年度から総面積216haにおよぶ圃場の整備に着手している。

山口県教育委員会ではこうした事業の計画段階で早急に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の所在の有無および範囲を確認するための予察調査を実施し、この成果をもとに事業者との間で調整を重ねてきた。これにより、最終的に地福地区昭和60年度施工区内の埋蔵文化財は惣原地区の水田4か所を記録にとどめるための発掘調査対象地区と定めた。

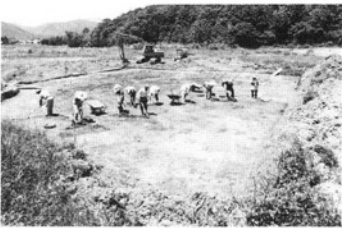
惣原遺跡は上記事業施行地内で予察調査により新たに発見され、昭和59年12月13日に周知の埋蔵文化財包蔵地として登録した中世期鎌倉時代を中心とする集落遺跡である。

調査期間は、昭和60年6月3日から8月5日まで。まず、遺跡の広がりや密度を詳細に把握し有効な発掘区を設定するため対象地区全域にわたりテストピットを設けた。本調査では、この試掘調査の結果をもとに遺構の分布密度の高い水田（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区）について全面発掘を実施することにした。

水田の基本的層位は上位より耕作土（厚さ18～22cm）・盤土（3～6cm：黄褐色粘質土）・地山土（褐色砂質土）の3層で地山土は小礫を含む沖積砂質土壌となっている。遺構はいずれも地山面から検出されるが、遺存状況からみてその上面は後世の水田開作に係る削平を受けているものと判断できる。各遺構は以下掘立柱建物－B・土壇－P・溝－W・柱穴－PHの記号で表記し、便宜上調査区の南から遺構番号を付して仮称した。

発掘は重機による耕土下盤土までの排土作業から開始し、遺構面の削出しへと移行。遺構検出が終わると、つづいて遺溝の掘込みを行う。時の流れを遡行し、埋没したむかしのひとつひとつの生活のあとを現代によみがえさせるもっともロマンあふれる作業であり、移植ごてをもつ手先に緊張を感じる一瞬でもある。

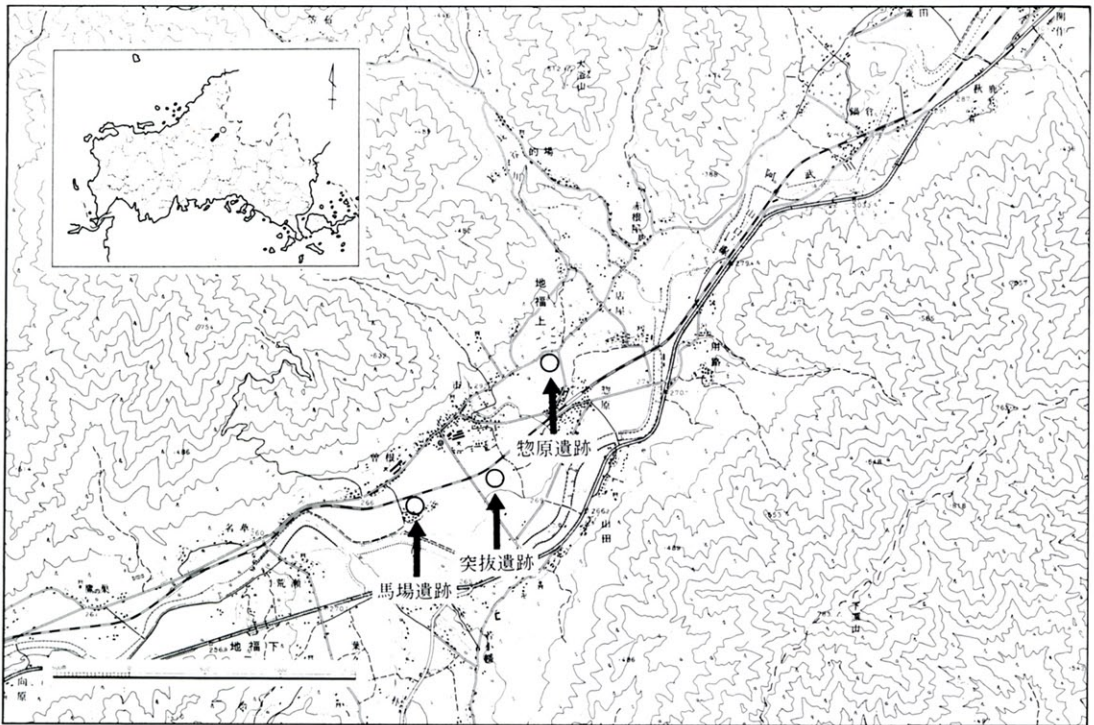
こうして遺跡の全容が明らかになると、各遺構の配置や個々の遺構について写真撮影・実測図化等の記録作成を進めて行き現地での作業を完了した。発掘面積は、約1,600㎡。



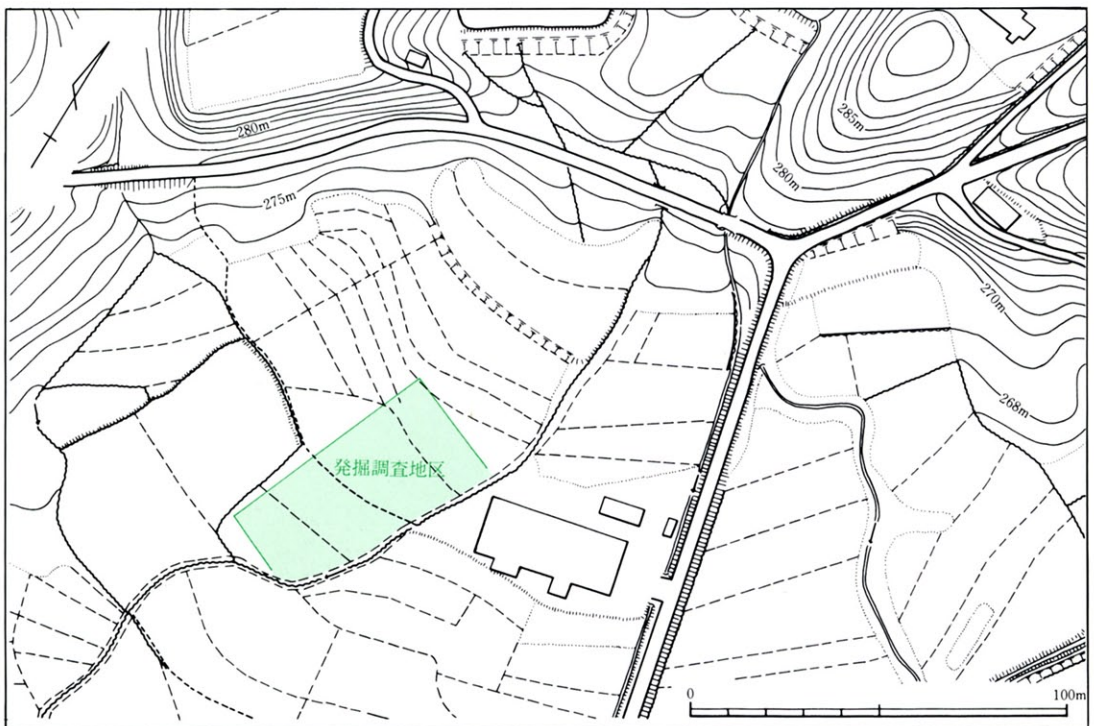
△すがたをあらわす遺跡



△埋もれた集落の掘りだし



△ 遺跡の位置



△ 発掘調査地区と周辺の地形





△遺構配置図

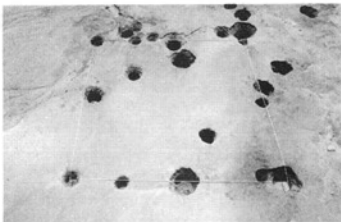
## \*\* 掘りおこされた集落 \*\*



△集落のようす(第Ⅰ・Ⅱ地区)



△第Ⅰ地区の建物群



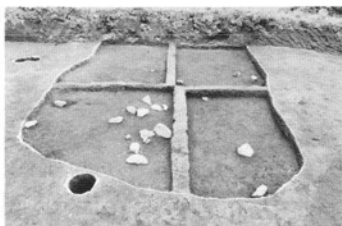
△掘立柱建物B-6(第Ⅱ地区)

発掘調査で、掘立柱の建物を証する柱穴が多数検出された。このうち柱穴の大きさや位置関係、埋土の相異等から建物として復元できたのは合計7棟。柱穴に伴って出土する土器類(土師器・瓦器)から、これらの建物の時期は鎌倉時代と考えられる。建物の規模は4間×3間・3間×1間・1間×4間・1間×1間がそれぞれ1棟ずつ、2間×1間が3棟となっている。柱穴の間隔はほぼ整然と配置されており、棟方向は概ね北一南方向と東一西方向の直交する2グループに大別できる。

**第Ⅰ地区** 調査区南域の第Ⅰ地区で検出された建物は3棟(B-1・2・3)。B-1は身舎4間(780cm)×3間(627cm)の総柱構造で、7棟の建物中最大規模をもつ。棟方向は、北一南方向を示す。柱穴の掘り方は直径22~39cm・深さ25~26cmで、根石を据えたものもみられる。床面は部分的に焼熟を受けて焼けしまり、また、殆どどの柱穴から土師器片のほか鉄滓や木炭が出土している。B-3は、第Ⅰ地区北東隅で検出。身舎2間(501cm)×1間(254cm)。桁行・梁行とも各柱は約8尺の等間隔を保って配され、錯綜する柱穴群は建替えがあったことを裏付けるものとみてよい。建物内で検出されたP-3は伴出遺物がなく時期決定が困難であるが、埋土や位置関係から推してB-3に附随する土壇と考えられる。また、柱穴内出土の鉄滓・木炭・焼土塊は棟方向を直交して隣接するB-1・2、あるいは後述するP-1の存在とあわせて建物群が鍛冶工房に係る機能を有していたことを推測させる。

**第Ⅱ・Ⅲ地区** B-4・5・7は、調査区を北東一南西方向に流れるD-1・2・3の間隙に散在する。第Ⅲ地区のほぼ中央に位置するB-7は、身舎3間(630cm)×1間(286cm)の規模をもつ。棟方向はN-36°-Eで、側柱の一部を欠失。柱穴の掘り方は直径19~22cm、深さ20~33cm。第Ⅱ地区からはD-1・2に挟まれた位置にあるB-4・5のほか、B-6がD-2の西岸で検出。棟方向はN-70°-W、身舎1間(320cm)×1間(322cm)。柱間寸法は、桁行・梁行とも等間隔で5.5尺。これらの建物からの伴出遺物はみられない。

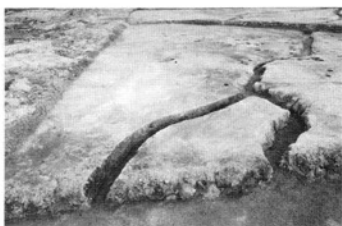
## \*\*水 と 炎\*\*



△土壌P-1の発掘

調査区内で検出された土壌は4基、溝3条である。土壌の配置は第Ⅰ地区が3基（P-1・2・3）・第Ⅲ地区1基（P-4）で、第Ⅱ地区からはまったく検出されなかった。

**P-1** 第Ⅰ地区の東端に位置し、その東半は水田畦畔のため拡張不可能であった。発掘部分は長径 368cm・短径 265cm・深さ10cmあり、N-61°-Wに主軸をとる不整隅丸長方形のプランとなっている。埋土には鉄滓や木炭の小片・焼土細塊等を多量に含み、土壌底面に密着した状態で土師器片（坏・皿）と鉄滓・鉄鋳石が出土した。底面から壁面にかけての土色は暗赤褐色を呈し焼熱を受けたことが明らかで、堅固に焼けしまっている。伴出遺物より、鎌倉時代の鍛冶工房に係る炉跡（火窪）と思われる。



△集落を流れる溝

**P-2** P-1の南に隣接し、東半は同様に水田畦畔のため未確認である。発掘部分の規模は長径 254cm・短径 158cm・深さ27cmで、主軸はN-53°-E。北西隅底面から土師器片（皿）と人頭大の自然石1個が出土。形状や伴出品からこの土壌の性格は判断しがたいが、P-1と同時期の関連遺構とみられる。

**D-1・2・3** 溝は第Ⅱ地区から第Ⅲ地区にかけて3条検出されたが、第Ⅰ地区については削平を受けて下流端はすでに消滅している。溝は概ね直線的で、地形の傾斜に沿って北東から南西方向へ流れる。断面形は浅い皿形が基本で、溝肩部が崩落して幅広となっているところも少なくない。埋土は1～3層をなし、上層は暗褐色系・下層は黄褐色系の砂質土である。各溝の最大幅はD-1=173cm・D-2=76cm・D-3=96cm、深さは最深部でD-1=36cm・D-2=33cm・D-3=19cm。これらの機能時期については、土師器片等の溝中内出土遺物から建物群と同時期と捉えてよからう。



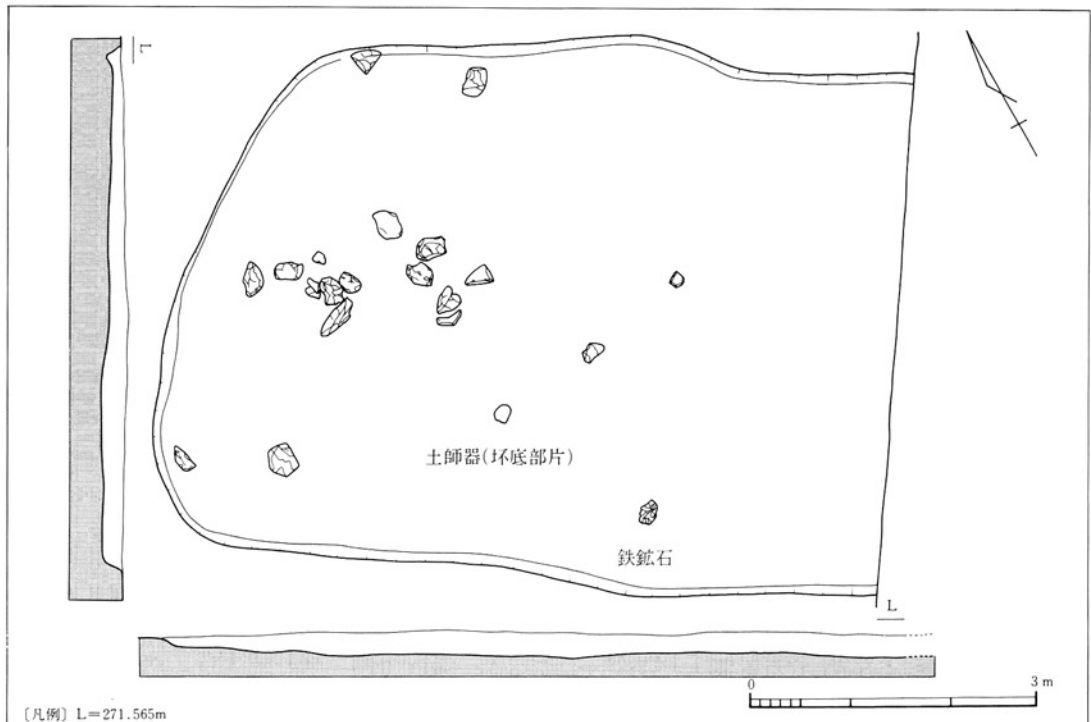
△出土した土師器

**出土遺物** 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区で検出された各遺構とも伴出遺物はきわめて少なく、B-2・3で土師器（皿）や瓦器（鍋）、P-1で土師器（皿・坏）のほか鉄滓等が出土したのみである。土器類はいずれも細片で遺存状態が悪く、とくに第Ⅲ地区からは遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

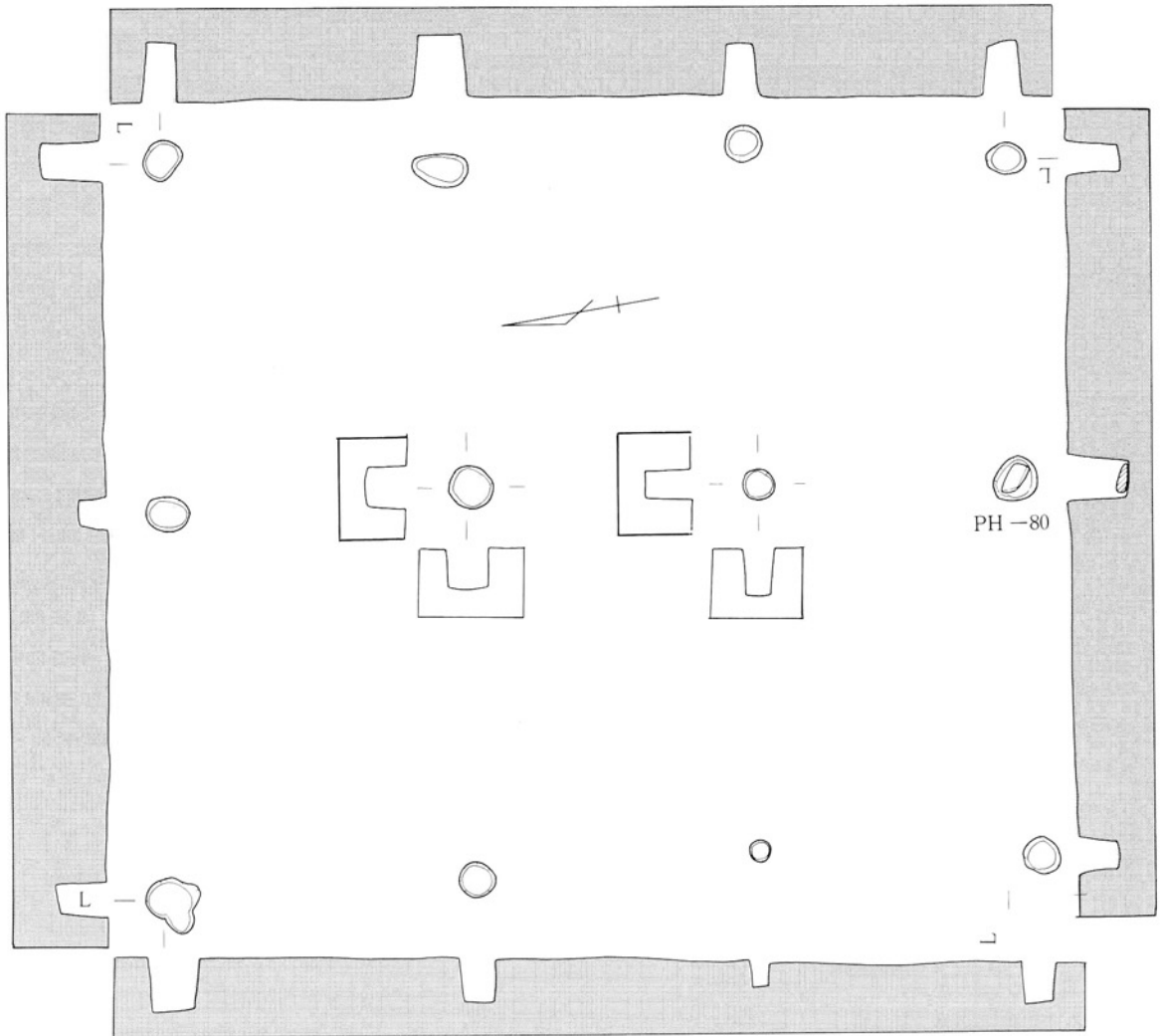
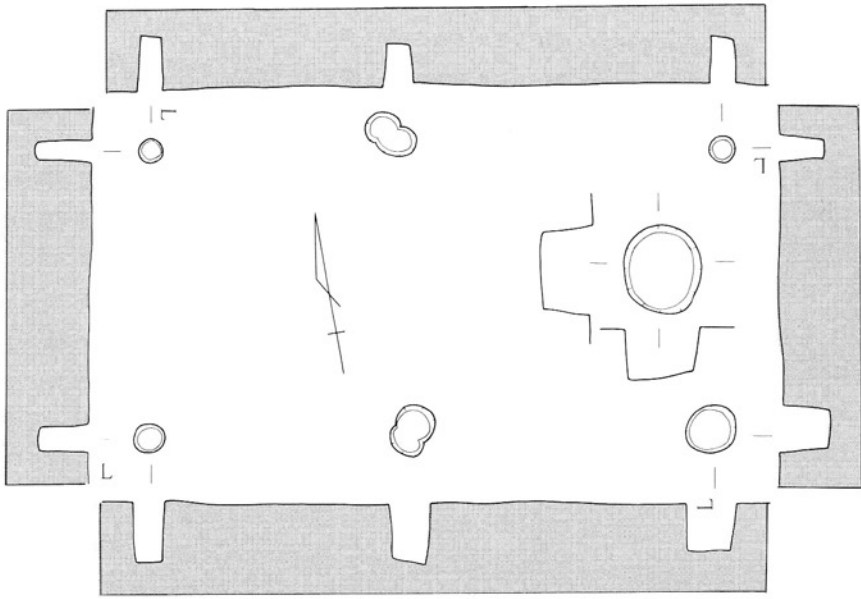
掘立柱 建番 号	棟方向 ↑ +	規 模 (間)×(間)	柱 間		出 土 遺 物	備 考
			桁 建物南西隅から(km)	梁 建物南西隅から(km)		
B-1		1×4	270・274・224	186		柱間整然
2		4×3	250・250・280	336・291	鉄滓・土師器片	総柱建物
3	—	2×1	231・270	254	鉄滓・土師器片	P-3を伴う
4	↘	2×1	464	310		柱間整然
5	/	2×1	388	191		柱間整然
6	↘	1×1	188・132	160・172		柱間整然
7	/	3×1	630	286	鉄滓	側柱欠失

土 壌 番 号	平 面 形	規 模(km)			出 土 遺 物	備 考
		長 径	短 径	深 さ		
P-1	不 整 長 方 形	(368)	265	10	鉄滓・土師器片・瓦器片	東側は水田畦畔のため未掘
P-2		254	(158)	27	土師器片	東側は未掘.人頭大の石あり
P-3		79	69	44		
P-4		211	199	9		埋土に細炭を含む

△掘立柱建物(上)・土壌(下)一覧表



△土壌P-2実測図



[凡例] L=272.565m

△掘立柱建物B-3(上)・B-2(下)実測図



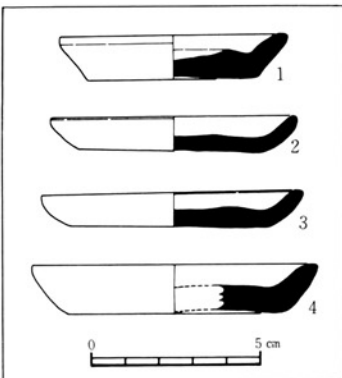
## \*\* よみがえる歴史のロマン \*\*



△鉄鉱石の出土(土壌P-1)

本遺跡で確認された集落の性格については、多量に出土する鉄滓・鉄鉱石・木炭・焼土塊等とあわせて鍛冶炉を伴う工房跡を推測させる建物群の所在から鎌倉時代の鉄生産技術者集団の居住地であった可能性が指摘される。調査区の中央部を流れる溝とこれに近接する建物の位置関係は、日常生活に加え鍛冶作業用水の利便を考慮して相互機能をもたせたものと捉えられる。他方、柱穴の検出数や整然とした柱配置から建物の建替えはあまりみとめられず、伴出した土器類にも時代幅が考えられないことから集落の造営存続は比較的短期間であったことが想起される。また、遺跡の立地が地福盆地中央部北縁に形成された小規模な扇状台地上にあたり、台地西辺を南下する長谷川流域の水田は深い湿泥地帯を拓いていることが発掘前に実施した周辺一帯の試掘調査の結果明らかにされており、この地域からは上代の遺構・遺物はまったく確認されなかった。したがって、集落の広がり台地上の小範囲に限定することができよう。

さて、わが国の古代～中世における製鉄原料は、砂鉄以外に鉄鉱石使用も近年になって数例確認されている。県下では本遺跡を含め中世期に属する遺跡として下右田遺跡(防府市)・玉祖遺跡(防府市)、さらに時代が遡る遺跡として突抜遺跡(阿東町)等が知られる。とりわけ、突抜遺跡は本遺跡の南西方向約0.8kmの河岸段丘上にあり、弥生時代(後期後半～終末)から平安時代にかけて同様に鉄鉱石を原料とする製鉄が行われていたことが推定されている。これは距離的な地理条件のみならず盆地内での同一産業(製鉄)継続の史的背景や技術系譜の関連性、また、集落形態の変遷等にも係って本遺跡との脈絡を考えるうえで興味深いことである。加えて、地福盆地北東方向の徳佐盆地で発見された製錬滓(鉄鉱石使用)を伴う小南製鉄遺跡や金山谷製鉄遺跡、また、阿東町嘉年地区等に良質な磁鉄鉱の多蔵地帯を近隣に控える恵まれた自然環境は夙にこの地一惣原一に鉄生産のための素地をひらいていたのであろう。永い時の流れのなかで譲成され伝えられてきたであろう「じふく」(地福=地吹く)一の地名の由来が窺知されよう。



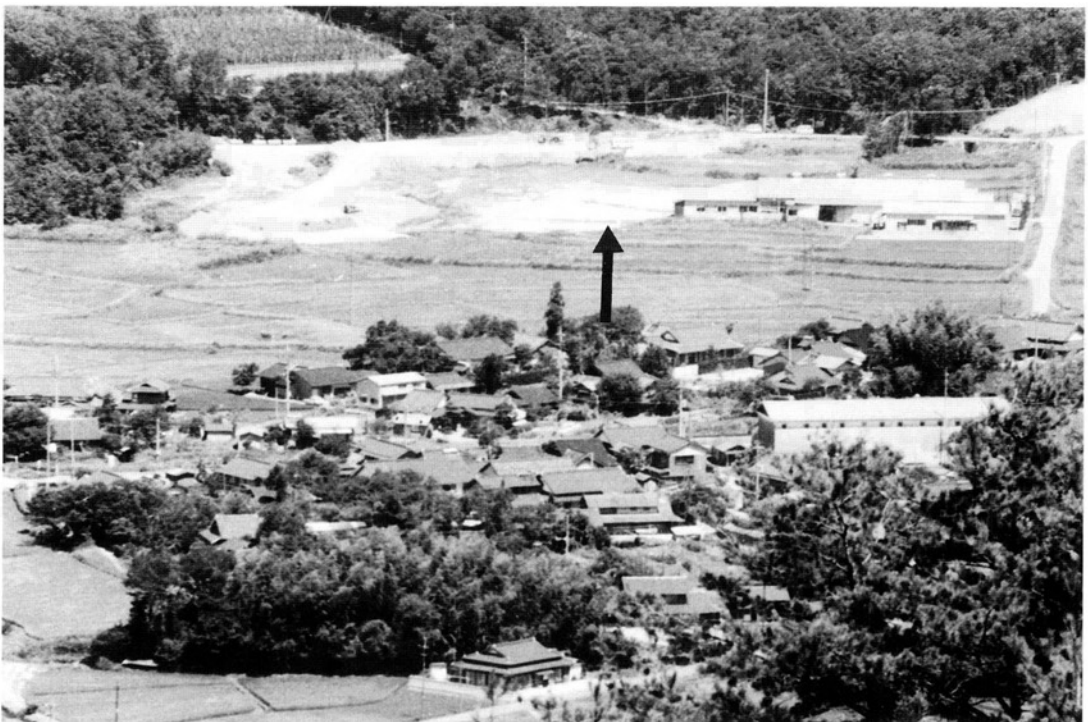
△土師器実測図(惣原遺跡)

*PLATES*

PLATE I



△遺跡の遠景(南から)



△遺跡の近景(南から)





△発掘された遺跡の全景(北から)



△第I地区(北東から)

PLATE III



△第 I 地区(西から)



△第 I 地区—東側(北から)



△第 I 地区 土壌 P-1 (北東から)



△第 I 地区 土壌 P-2 (北西から)

PLATE V

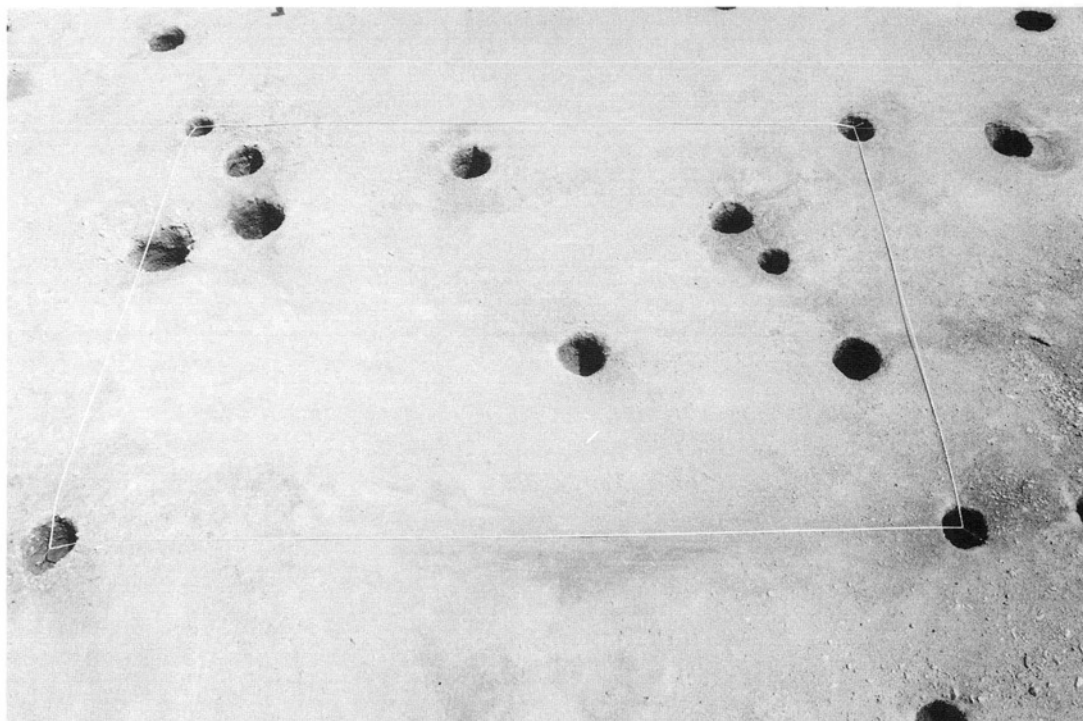


△第Ⅰ～Ⅱ地区(北東から)



△第Ⅱ地区(北西から)





△第Ⅱ地区 掘立柱建物B-4(南から)

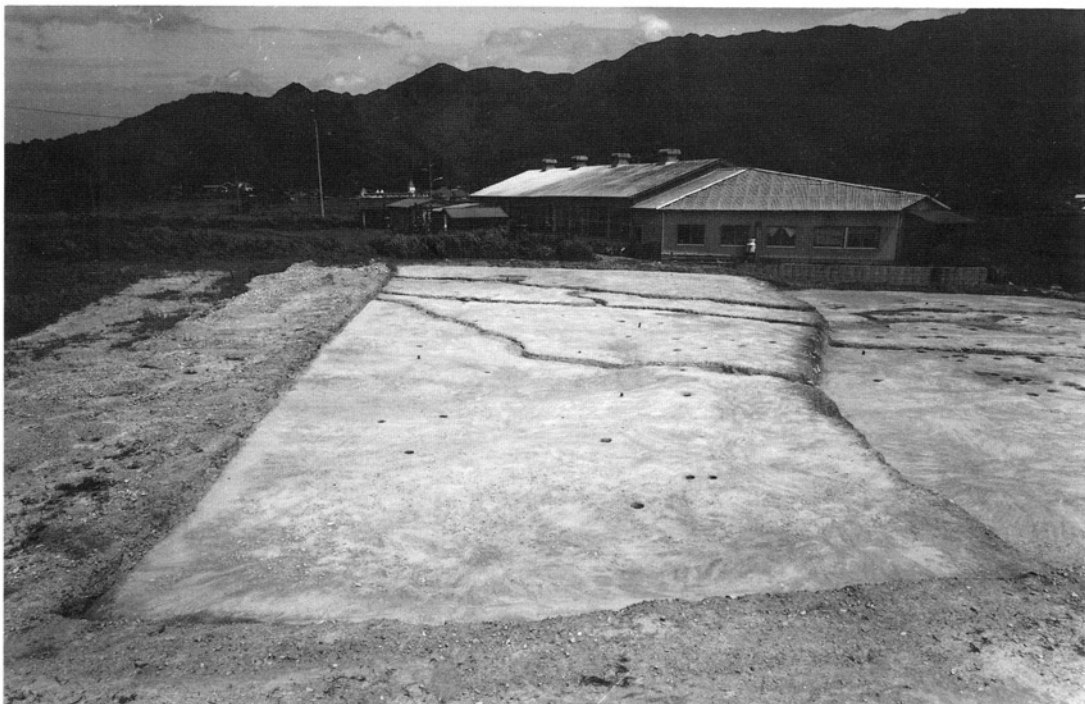


△第Ⅱ地区 溝D-1・2(北から)

PLATE VII



△第Ⅱ地区 溝D-1(南西から)



△第Ⅲ地区(西から)



△第Ⅲ地区(東から)

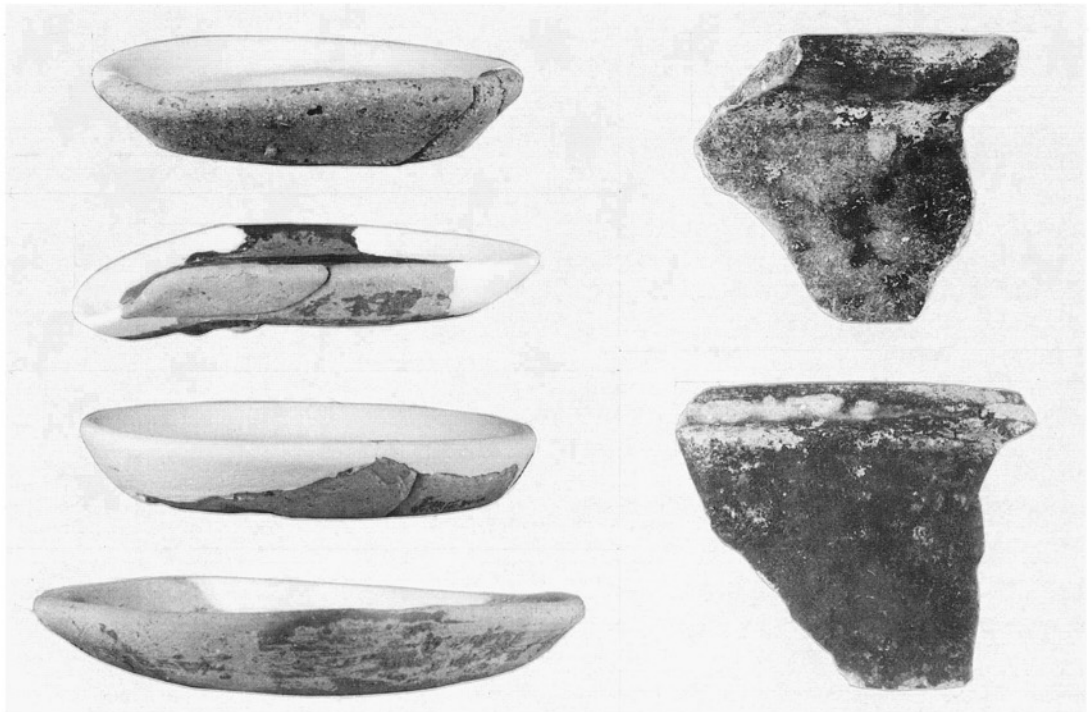


△第Ⅲ地区 掘立柱建物B-7(西から)

PLATEIX



△第Ⅲ地区 土壇P-4(北東から)



△出土品



---

---

山口県埋蔵文化財調査報告第93集

# そうばら

県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

昭和61年2月

編集 財団法人山口県教育財団  
山口市大手町2130  
山口県教育委員会文化課  
山口市滝町1-1  
山口県埋蔵文化財センター  
山口市春日町3-22  
発行 財団法人山口県教育財団  
山口市大手町2130  
山口県教育委員会  
山口市滝町1-1  
印刷 大村印刷株式会社  
防府市大字仁井命1505

---

---